

日本記者クラブ会報

一九九九年五月二十七日（木） 総会記念講演

東京都千代田区内幸町二一〇一
日本プレスセンタービル
◎ 社団法人 日本記者クラブ
電話 〇三三五〇三二七二二

スーパー・システムとしての人間

—— 生命から文明を考える ——

多田 富雄

（東京理科大学生命科学研究所所長）

初めは何ものでもないものが、自分で自分をつくりだしていく……。複製、変異を繰り返して、多様化する。それらがつながり合って、情報交換を行い、組織をつくりあげていく。目的に対応して要素を集めた工学的システムとは違うので、これをスーパー・システムと呼ぶ。

このごろは生命科学に関連する社会的な話題がたくさんあります。二十世紀後半は生命科学の時代と言われるほど、生命科学が飛躍的に発展しました。単に発展したというだけではなく、生命操作や臓器移植、遺伝子の組

み換えから、最終的にはクローン人間の問題まで現れた。直接、わたしたち人間の社会生活にかかわる問題として、生命科学が取り上げられています。また従来は、人体や生命というのは独立し

た存在だと考えられていた。周囲の環境がどんなに変わろうと、最終的によって立つところの内的な自然と申しますか、「これだけは変わらないだろう」と考えられていた。ところが最近、環境ホルモンの問題などに見られるように、内部環境と外部環境が突然つながってしまった。これが現代の特徴なのではないかと思えます。

私たちの内的な生命、あるいは内的な自然が変化してしまった。そのために、伝統的な生命観も変わってしまったのではないかと思うのです。

DNA決定論の登場

では、どのように変わってきたのか。一九五三年にDNAの基本的な構造が解明されました。その結果、生命現象のほとんどすべてが、遺伝子の働きとして理解できるよう

目次

スーパー・システムとしての人間	1
多田富雄・東京理科大学生命科学研究所所長	
速水 優	11
日銀総裁	
昼食会質疑応答から	
柳沢伯夫	15
金融再生委員長	
昼食会質疑応答から	

なった。すでに六百以上の病気が、特定の遺伝子の変化によっておこることが証明されています。そうした流れのなかで、生命現象そのものを、遺伝的に決定されている現象であるとする考え方が出てきました。人間の生命、あるいは人間の心にとりまてDNAで決定されている機械論的な現象としてみる。いわゆるDNA決定論です。

例えば、私たちの容貌や性格、さらには行動様式も、両親のどちらかに似ているわけです。考え方の中にさえも、遺伝的に決定されている部分があることが分かってきました。このようにDNAによって決まっているものがたくさん見つかってきますと、人間というのとはもとDNAの乗り物だ、という考え方が出てきます。

DNAの本性は自己複製をすることです。自分と同じDNAを残すために、使い捨ての乗り物として、人間を作り出した。不要になつたら乗り捨てて、DNAだけは生き残る。いわゆる利己的DNAという考え方です。しかし本当にそうなのか。生命はどこまでDNAによって既定されているのか。DNAはどのような生命を、あるいは人間を既定しているのか。これには、まだまだ分からないことがたくさんあります。

私はきょう、生命活動の結果として作り出

される文化現象、社会現象などを、生命科学の立場から、あるいはDNAの側からなめるとどうなるのか、ということについて話してみたいと思います。

DNA決定論が出てきた理由は明らかです。DNAによって決定されることが、多く見つかってきたからです。例えば、非常に原始的な動物ですと、DNAで完全に一生が決定されているものがあります。

線虫という体の長さが一・二ミリの動物がいます。昆虫ではなく、寄生虫に非常によく似た原始的な動物です。そのへんの掃きだめあたりをひっくり返して、ちよつと取つてきて顕微鏡で見ると必ずいます。体の動き方が非常にエレガントなことからC・エレガンスという名前で呼ばれています。この動物の一生は、完全に遺伝子で決定されています。

このC・エレガンスは、現代の生物学の中で重要な役割をもっていて、大変な人気者です。エレガンス学会という国際学会があるくらいです。なぜそんなことを研究するのか。その虫は、一個の受精卵からたった十九時間で一匹の虫になります。虫の卵を顕微鏡でながめていると、細胞分裂を繰り返して体ができていく様子が全部観察できるのです。たった十九時間で消化管、生殖器、神経など、すべてをもった一匹の動物になり、みごとにエ

レガントに動き出す。

十九時間で完成した線虫は、必ず九五九個の細胞からなっています。例外はありません。九五九個で分裂が止まり、一生が始まります。そして二週間程度で必ず死にます。

「生」のためには「死」が必要

発生して二つに分かれた細胞のどちらから、腸のどの上皮細胞が生まれ、生殖器の入り口の細胞が生まれるかなども、全部決まっています。たった一個の細胞から、九五九個の細胞に枝分かれしていく系譜が、全部分かつているのです。また、九五九個になるまでの過程で、百三十一個の細胞が必ず死にます。どの細胞が死ぬかも、完全に決まっています。その細胞が死なくなると、体が異常になつて、生きていくことができません。

このことから、生命が発生して生きていくためには、死という現象が必ずあることが分かります。また、生命の発生において、どの遺伝子が、どのようにして働くのかを解析し、細胞が死ぬためにはどんな遺伝子が働くのかを決定できます。

実際に、線虫の研究から、いま人間は、死の遺伝子を発見しつつあります。たかさんの遺伝子がすでに見つかつていて、それらはな

かな複雑な構造になっている。そして、死を決定する遺伝子、実行する遺伝子、それを止める遺伝子、促進する遺伝子、つまり死を決定し、死を調節する遺伝子が、次々に見つかっているのです。

そして、その遺伝子は線虫だけではなく、実は人間も持っています。非常に原始的な時代に、生命は死の遺伝子を発明し、どんどん進化させてきたらしいのです。人間も、多くの細胞が毎日死んでは入れ代わっています。最終的には人間の個体も死んでしまいます。ひとはなぜ死ぬのか、を遺伝子レベルで解明するための、入り口を提供しているわけです。老化を起こす遺伝子や死ぬ遺伝子など、一生を決定する遺伝子も全部見つかった。線虫という動物は、現代の生物学の中で、大変重要な役割を果たしているのです。

では、人間を含むもつと複雑な動物の一生も、やはり全部決まっているのか。実はそうではありません。魚類、哺乳動物といった非常に複雑な構造をもつ脊椎動物の一生は、線虫と同じようには決まっていらないことが分かっています。

例えば、すべての人間は受精卵から始まります。その受精卵が二つに分かれて、どちらから何ができるかなどは、まったく決まっています。二つに分かれた細胞の片方をつぶ

してしまうと、もう片方の細胞から、全部の人間の体ができます。また、四つ、八つと分かれていって、数十個になったときに桑の実ぐらいの大きさになります。それを二つに分けて別の子宮に植えると、二人の人間ができてしまいます。つまり、運命は、なかなか決まらないのです。

例えば、数十個の細胞からなつたところで、大部分の細胞は胎盤という組織になります。私たち人間は、胎盤にならなかつたごく一部分の、一個か二個の細胞から生まれてくるわけです。それで胎盤の方は、私たちが生まれるときには必ず死にます。やはり人間が生まれるためにも、死ぬべきものを必ず作っている。そして、その死ぬべきものというのは、人間を生かすためには絶対に必要なのです。その結果として十月十日の間に、必ず人間の形をして生まれてくるのです。

そしてその間で、どの程度まで運命が完全に決まっているかというと、これがなかなか決まらない。たくさんに分かれた細胞のうちどれが心臓になり、どれが腎臓になるかが決まるのは非常にあとの方です。何百個もの細胞が生まれ、それが何になるのか分からない状態が初めにある。そのうちに、細胞同士の情報交換が起こります。「おまえは心臓になれ」「おまえは腎臓になれ」と、互いに指

示し合い、相談し合いながら、体を作っていくことが分かっています。

遺伝子組み換えは人とミミズでも

ショウジョウバエという原始的な動物がいます。原始的と言っても、線虫とは比べものにならないくらい複雑で、高級な動物です。このハエに、人間の目を作るための遺伝子を入れてやります。遺伝子の組み換えは、人間と植物の遺伝子だろうと、人間とミミズの遺伝子だろうと、全部組み換えすることができません。人間から取った遺伝子を、ショウジョウバエの中に入れることも可能なのです。そうすると何が起こるか。ショウジョウバエに余分な目ができてきます。

これはウォルター・ゲーリングという、スイスの発生学者がやった実験です。人間の目を作るために必要な一つの遺伝子を、ショウジョウバエに入れて発現させた。すると、十四个もの目をもつたハエが生まれたのです。それが「ネイチャー」という雑誌の表紙に載って、世界中の人がびつくりしました。さて、どんな目ができたかというと、人間の目ができたわけではありません。

人間の目というのは、角膜、硝子体、眼房、網膜、視神経などがあり、複雑な構造を

もつた器官です。それに対して、昆虫の目は複眼です。一つ一つ視神経をもつた、小さな個眼というものが集まってできています。トシボの目ですと、八百個ぐらいの個眼が集まって、一つの目を作っています。ですから、構造上はまったく違うのです。しかし、人間の目を作るための遺伝子を、ショウジョウバエに入れてできた目は、みんな複眼です。それを十四個も、足や触覚の先などにもつたショウジョウバエが生まれたのです。

この実験は何を意味しているのか。遺伝子は、完全にすべての構造を決めているわけではないのです。一番最初の引き金を引く遺伝子を入れてやると、それが回りの細胞に働きかける。その回りの細胞が、自分が持っている遺伝子を条件次第で動かして、次々にいろいろなものを作る。こうして目という構造体を作りだす。目を作る遺伝子、といっても、それが目全部を決めているわけではないのです。ですから、人間の目を作る遺伝子を昆虫に入れば、昆虫の目ができてきます。おそらく、昆虫のその遺伝子を人間に入れば、人間の目ができてくるでしょう。

通常、目を作るためには約二百個の遺伝子が働いています。それらが次々に働きます。その結果、例えば角膜ができて、網膜ができて、別々のものができてくる。そして、

それぞれが互いにつながり合う。最終的には目という光学機械ができて、それがものを認識するために働くわけです。

ですから、遺伝子決定論と言っても、すべてが決まっているわけではない。引き金を引く遺伝子があれば、それが、次々に別々の異なった細胞に働いて、要素をそれぞれの細胞に作り出させる。作り出された要素が、お互いにつながり合う。こうして、目のような、非常に精巧な機械まで作り出してしまうのです。

なぜそんなことができるのかについて、いろいろな実験が行われています。

東大の教養学部で浅島誠さんという生物学の教授がいらつしやいます。その方がやったとてもおもしろい実験を紹介します。

アフリカツメガエルというカエルがいます。そのカエルの卵が分裂してオタマジャクシを作る過程で、数十個の細胞からなる、包胚とよばれる細胞のかたまりができます。その時点ではどの細胞が何になるかは決まっています。ただ、その細胞のかたまりの上下が区別できるようになります。

上下、前後はどうして決まる

上下というのは、なかなかやつかない話な

のです。何をもって上とするかというのは、ふつうは重力があるから決まるわけです。向井千秋さんが宇宙でイモリの発生の実験をやりました。あれは、重力がないところでどうして上と下が決まるのか、が問題だったからです。無重力下でもイモリはちゃんと発生しました。つまり、重力とは無関係に上下が決まるわけです。

では、どうやって決まるのか。実は、上下の前に、前後が決まるようです。前後が決まると、自動的に上下が決まります。それでは、何をもって前にして、何をもって後ろにするのか。人間などの哺乳動物の場合は、卵のところどころに精子が一匹泳いできて、頭を突き刺します。これが受精の最初なのですが、精子が入ってきた方が、一般には背中側になります。卵細胞の中には、母親からもらったある種のホルモンがあります。精子が入った刺激で、そのホルモンの濃度が少し変化する。精子が入ってきた方と逆で、ホルモンの濃度が違うことから前後が決まるようです。

こうして上下が決まっても、上の細胞から何ができるかなどは決まっています。その時点の細胞をとってきて試験管の中で培養してみます。何もしないで培養していると、ゴチャゴチャと細胞が増えて、そのまま死んでしまいます。そこに、アクチビンというホル

モンを、ほんの少量加えて培養します。すると、そこから袋状の構造ができて、その袋の中に、血液の細胞がたくさんできてきます。

私たちの体は、いろいろな袋からできています。たとえば、胸腔という袋や腹腔という袋があるわけです。アクチピンは、体腔を作り出して、その中に血液系の細胞を作り出させるのです。アクチピンをもう少し増やしてやると、今度は、腎臓のような構造ができてきます。さらに増やすと、今度は心臓のような構造ができて、そしてピクピクと拍動を始めるのです。

それ自身はほっておけば死んでしまう、何ものでもない細胞に、アクチピンが働く。そのことにより、最終的には心臓から腎臓、あるいは筋肉とか骨といったものまで作り出させる。こうしたことが分かってきた。それが濃度に依存して、外界からの刺激、つまり外界からの情報をもとに、その細胞が新しく遺伝子を働かせる。その結果として、ある場合には筋肉になり、ある場合には心臓になるというように、いろいろな運命の決定を自分で行う。その運命を決定させるための刺激になるのが、この種のホルモンです。

それではホルモンとは何かというと、分かりにくいかもしれませんが、ホルモン焼きなんてありますが、実は関係ありません。ホルモ

ンとは、ある種の情報物質なのです。あるところから、ある細胞が情報を出します。それが血液の中などを流れて遠いところについて、別の細胞に働きかける。そういう働きをもつ情報物質を、ホルモンとよんでいます。

ホルモンは神のプログラムにも関わる

例えば、インシュリンというホルモンがあります。インシュリンは、膵臓のランゲルハンス島というところの細胞が出します。それが血液の中を流れていって、ほかの細胞のホルモンの受容体に結合します。すると、その細胞は糖を取り込んで、グリコーゲンという、エネルギーのもとになるものを作り出し、蓄積し始めます。それがうまくいってれば問題はありません。が、情報があるにもかかわらず、受容体が働かなかつたり、インシュリンが少なくなつたりすると、糖尿病になるわけです。ですから、ホルモンというのは、ほかの細胞に働きかける一種の情報物質である、と考えていただければいいのです。アクチピンというのは、もともとは脳下垂体から卵巣を刺激するホルモンを出すのを調節するホルモンとして、昔から知られていたのです。

もともとホルモンとは、体の中を調節する

ものとして考えられていました。それが実際には発生という、神のプログラムにさえ関わっていることが、最近になって分かってきたのです。

もう一つ例をあげます。徳島大学工学部の野地澄晴先生という、やはり発生をやっている方の実験です。ホルモン情報物質の一つに、繊維芽細胞増殖因子(FGF)というのがあります。それを人間の胃ガンから取り、卵の中でニワトリが発生している途中の胚に注射します。胚とは、人間でいう胎児の段階です。その胚の胸のあたりに注射しますと、そこから驚くなかれ、もう一本の羽根がはえてきたのです。ですから、二本羽根のある動物ができました。

FGFを、足の近くに注射すると、足がもう一本生えてきて、三本足の動物ができました。それを野地先生は「蛇足」といいました。

もちろん、人間ではそんなことはできません。しかし、実験動物の段階では、いわゆる五体満足という神様が考えたグランドデザインまで、たった一種類のホルモンを使うことで変えることができるようになっていきます。

つまり、グランドデザインに相当するものは、絶対的に遺伝的に決まっているわけではない。外界からの情報物質などによって変化させることができるのです。たまたま細胞の

分裂、増殖の途中で、互いの情報交換がうまくいっているために、人間は人間の形をしているのです。実際は、全部が決まっているわけではない。いろいろな細胞が、異なった細胞を次々に作っていくというプログラムがあるだけなのです。そうして人間のような非常に複雑なものまで作り出していくことが分かったわけです。

その点は、最初にお話した線虫とはまったく違う。すべてが決まっているわけではなく、いろいろな点で、新しくものを作り出していくプロセスである、ということがお分かりになると思います。

免疫血液系はたった一種の細胞から

こうしたことが発生レベルでわかってくると、血液や免疫など複雑な生体の調節システムについても、同様にながめることができることに気がつきます。例えば私たちの血液の中には、赤血球や血小板、白血球があります。白血球には、好酸球、好中球、好塩基球と三種類あります。マクロファージという細胞もいますし、何種類かのリンパ球がいます。リンパ球は免疫系を構成して、自分以外のものが入ってきた場合にそれを排除して、全体を守る働きをしています。

それら血液中の何種類もの細胞は、常に一定数が作り出されています。それらが互いに、先ほどのホルモンに相当するようなサイトカイン、インターフェロン、インターロイキンと呼ばれる、いろいろな情報物質を出し合い、互いに調節し合っていてのが免疫血液系です。白血球はリンパ球を刺激するホルモンを作っています。リンパ球は赤血球を作り出すホルモン、血小板を作り出すホルモンなども作っている。そうやって、互いに相談し合いながら、体の態勢を作り出しているのです。血小板も赤血球も白血球も、みんな顕微鏡で調べると、まったく違う形をしています。ですが、おおもとは骨髄の中にある造血幹細胞という、たった一種類の細胞です。

その幹細胞が骨髄の中でゆっくり分裂して、自己複製を繰り返しています。そこに外界からのホルモンが働きます。一部の細胞はリンパ球に、一部の細胞は白血球に、一部の細胞は赤血球に、いろいろな異なったタイプの細胞に変わっていきます。それらが一定の数でき、互いに情報交換をして、免疫血液系ができてくる。これは、何ものでもない受精卵が分裂増殖しながら、だんだん自ら自分の運命を決定し、互いに組織化して、体を作っていくやり方と非常によく似ています。

私は、こうした体内の巧緻で複雑なシステ

ム、例えば脳神経系、免疫系、内分泌系、あるいはそれらを作り出す発生のプロセスそれ自身を、「スーパー・システム」と呼びたいと思ったのです。「システム」を辞書で調べると、「いろいろな要素を寄せ集めて、つなぎ合わせて、それが有機的に働いている要素の集合体」と出ています。「システム」はある目的のために、いろいろな要素を寄せ集めて作り出されます。

自分で自分を作り出すプロセス

ところが、体のでき方を考えてみますと、はじめから要素なんてないわけです。はじめは何ものでもないものが自己複製をしている。その間に外界からの情報を受け取って多様化する。多様化したものが互いに連絡をとり合って、システムを作る。しかし、それは通常の機械的な、工学的なシステムとはやり方が全然違う。初めは何ものでもないものから、自分で自分を作り出していくシステムなのです。

脳神経系も実はそうなのです。脳神経系のでき方を考えてみます。これもやはり、神経上皮細胞という、何の働きもない細胞が、分裂増殖することから始まります。その細胞の表面に、互いに情報を与え合う分子と、それ

を受け取る受容体という構造がある。まったく偶然にできて、うまくつながり合った場合には、片方の細胞は神経細胞になる、もう片方の細胞は脳などにある、グリア細胞というものになります。そうして脳の形をつくっていく。

コンピュータの配線、あるいはコンピュータのチップ、半導体に相当するものが神経細胞です。しかし、それだけではコンピュータができません。プラスチックや絶縁体などがあつてはじめて、コンピュータができる。その絶縁体やプラスチックに相当するものが、グリア細胞です。

グリア細胞になるか、神経細胞になるかというのは、はじめは偶然に決まる。が、いったん二つの細胞に分かれると、そこにまた別なホルモンなどが働きます。そして神経系の細胞は動いていつて運動神経になったり、あるいは脳の神経細胞になったり、あるいは脳の非常に複雑な回路構造をもっている細胞に変わったりと、いろいろな細胞に変化します。それらが、互いにうまくつながり合つた時だけ生き残り、そうでない細胞はみんな死んでしまうわけです。

ですから、脳ができるためには、われわれがもっている脳の細胞よりも、はるかに多くの細胞が作り出されているのです。配線がう

まくつながらなかった細胞は死んでいって、その結果として我々の脳ができてくるわけです。それは、線虫の体ができる途中で、多くの細胞が死んでいったのと同じやり方です。脳神経系の細胞を殺す遺伝子は、線虫の細胞の死を決定している遺伝子と同じであることが分かっていきます。

このように自分で自分を作り出すプロセスから、脳神経系という非常に高次のものが出てくるわけです。その時の原理はやはり、それ自身は何ものでもない細胞の自己複製から始まるわけです。それ自身は何ものでもない、ということはずべての可能性を持つていて、とも言えます。そして、単純な複製を繰り返しながら、多様な細胞に変わっていく。それらが互いにつながり合つて情報交換をする。情報交換に成功した細胞だけが生き残り、情報が十分与えられなかった細胞は死んでいく。

このように自己適応しながら自己組織化をしていくと、一種の閉鎖構造ができてしまうはずです。しかし、生命のシステムの場合には、閉鎖構造にはならない。情報交換をしてきた受容体を外側に向けて、外部の情報を取り込みます。それを自分の内部情報に転換すること、システム自体もだんだん大きく、複雑化していきます。免疫血液系、脳神経系

でも同様のやり方をしていきます。

ですから、これは通常のシステムとは違う。しかも、初めから何か目的があつてそういうことをやっているわけではない。目的に応じて要素を寄せ集めて作った、いわゆる工学的なシステムとは違うのです。そういう意味で「スーパー・システム」と呼んだのです。スーパー・システムは、体の中で、非常に高次の働きをもっている発生、脳神経系、免疫などに共通のやり方なのです。

生命現象はタンパク質の相互作用

人類を作り出してきた進化の過程をみると、やはり同じようなことが起こっていたのではないかと思われまます。個体発生の過程では、系統発生が繰り返されます。進化の過程と、受精卵から赤ちゃんが生まれるまでの発達段階とに類似性が指摘できます。遺伝子が、非常に高次の複雑なものを作り出すやり方が、やはり同じだったのではないか、と思われるふしがあります。

生命の起源というのは、なかなかやつかない問題です。必ずしも結論が出ていないわけはありません。現在の分子生物学者が考えていることの一つを紹介します。

ロサンゼルス大学のベックマン研究所に、大野

乾さんという分子生物学者がいます。その方がおもしろい研究をしています。男と女がどうしてできたかといった研究もしたのですが、同時に、生命の起源について重要な学説を出しています。それは遺伝子の重複による進化という考え方です。

遺伝子は、ヌクレオチドという、チミン、グアニン、アデニン、シトシンなどの化合物がつながり合って、情報を作り出していきま。ちゃんと意味のある遺伝子の構造ができたのは、数十億年前と思われる。初めに一回だけ偶然にそういうことが起こったのでしよう。それが生命のおおもとである、と考えます。意味のある遺伝子とは、意味のある文章のようなものです。遺伝子は初めはまったくランダムだったはず。それが、皮膚のあるタンパク質を作る遺伝子、目のあるタンパク質を作る遺伝子など、まとまった構造を持つようになるわけです。

非常に単純な文章の繰り返しのように、最初に遺伝子ができる、その遺伝子は必ず複製されます。それが生命の基本です。自己複製をすることがDNAの本性です。ある条件が整いますと、いくらでも複製することができます。たった一個の細胞から何億という遺伝子をコピーすることができます。初めに単純な遺伝子ができると、単純に自己複製をし

ていく。自己複製をしながら、場合によって重複をしていきます。同じ遺伝子がいくつも並んで、重複をしていくのです。大事な遺伝子であっても、すでに自分と同じものがあるわけですから、あるとき突然変異がおこります。それを利用することで、多様な遺伝子を作っていく。多様な遺伝子ができると、それらがつながり合う。そこでまた別の遺伝子ができる。あるいはそれらが交差して、二つの遺伝子がつながり合うことで、さらに多様化していく。多様化した遺伝子ができると、その産物であるタンパク質は、互いに認識し合って反応を始めます。生命現象は、基本的にタンパク質同士の相互作用によって決まります。

このように複雑化して互いの相互関係ができて、それが一つの生命のユニットとなります。その最初がおそらく細菌だと考えられます。細菌というのは複雑なもので、何十もの遺伝子があります。その遺伝子の産物が互いに働き合って、細胞の生命を作り出していくのです。いったん細胞ができると、その細胞がさらに多様な細胞を次々に生み出していく。それがつながり合って多細胞生物になる。最終的に、三十億年もの長い時間をかけて、人間にまで進化してきたわけです。

もともとは無意味なたった一個の遺伝子。

それが自己複製をして多様化していく。多様化したものは、互いにその産物を介してつながり合って、複雑化していく。このやり方は、一個の受精卵から体ができる、あるいは一種類の造血幹細胞からいろいろな血液細胞ができ、それがつながり合って、体の調節をするやり方とよく似ている。ですから、生命の発生、そしてその生命が複雑化して進化していく過程も、やはりスーパー・システムを作り出すシステムとして見る事ができるのではないか、と思われるわけです。

言語も複製と変異を経て

こうしたやり方は、生命活動の結果にも表れているのではないだろうか。たとえば、人間のさまざまな文化活動にも表れているのではないか、と私は思うのです。一つの例として、言語を考えてみます。言葉は、しばしば遺伝子に比較されます。遺伝子も、四種類の文字がずーつと並んでできる、情報の文章です。そして、それぞれの部位で異なった文章が発現することで、人間のように非常に複雑な生物ができる。ですので、言語も遺伝子の発生と同じような、スーパー・システムとして発達してきたのではないか、と考えられるのです。

言語はいつから発生したのか。諸説ありますが、ネアンデルタール人など旧人類は、言語はもっていないか、と言われています。われわれと同じ新人類というのはクロマニヨン人などからです。比較的最近見つかったものに、アルデツシユの洞窟の壁画があります。あれが三万年ぐらい前です。多分、それより前は、人間は絵も書くこともできなかった。つまり、象徴的な能力というのは、三万年か四万年か、そのぐらいのところから生まれたらしい。そうすると、言語というのも、新人類から始まったということになるわけです。

新人類は最初にどんな言語を使っていたのか。赤ちゃんが言葉を覚えたり、作り出したか。赤ちゃんが言葉を作るとき、ママとか、そういう言葉だったのかもしれない。あるいは、アーとかオーとか、もつと単純な要素だったのかもしれない。それを繰り返すうちに、ウマウマになったりママになったり、まず最初に一つの言葉ができる。その一つの言葉を繰り返していくうちに、突然変異が入って、多様な言葉が作り出される。このように、だんだん言語が発達してきた。

最初に、要素としての非常に限られた言葉がありさえすれば、遺伝子重複による生命の

進化と同じやり方で、多様な言語を作りだせる。一度多様な言葉ができると、今度は言葉自身がルールを作り出す。文法を作り出すのです。文法にしたがつて、言葉はいろいろな創造性をもってくる。それによつて、日本語、英語などの国語ができた、と考えられます。そうすると、そのやり方はやはり、基本的にスーパードメインと同じといえます。

その言語は免疫系と同じように、自己をもつようになると思うのです。

例えば日本語の中にギリシャ語が入ってきます。それは自己以外のものですから、免疫系統と同じように排除します。が、単に排除ばかりではいなくなるときには、それに対応する訳語を作り出します。例えば、フィロソフィーという言葉があります。それに対して哲学という言葉を作ります。それは、免疫系が杉の花粉に対して抗体を作るのと同じだと思えます。抗体は杉の花粉と同じものではないです。「杉の花粉」という情報を生体が処理するために必要な、新しい分子なのです。

このように、訳語を作ったりしながら、言語はどんどん発展していく。別に目的があるわけではありません。非常に原始的な情報の手段から始まって、非常に高度の創造能力までもつ国語が作り出される。これもスーパード

システムの一つの表れなのではないでしょうか。

都市、国家なども同様に考えることができます。都市も、家が一軒できて、二軒になって、四軒になってと、初めは単純な自己複製から始まる。自己複製したものは、相互関係を作り出し、階層構造を作り、分業構造を作る。そして都市を作り出していく。これが、いわゆる自然発生の歴史的都市です。バルセロナなどを見ますと、たしかにそうだと分かります。

たとえばギリシアの植民地時代の小さな要塞のような家がつながり合った遺跡があります。それがローマ時代には城壁をめぐらした都市になり、たぐさんの人が住むようになって。宗教の中心地ができたり、マーケットができた。体の発生において心臓や腎臓ができるのと同様に、外部からの情報を取り込みながら、都市としてだんだん発展してきた。こうしたことが、バルセロナの歴史を見ると分かると思う。

こうして、都市も自己をもつようになりま。東京はモスクワと明らかに違います。ニューヨークとローマも違う。都市はそれぞれの自己というものを作り出すのではないかと思えます。

ゲノムが教える基本的人権の意味

いま、ユーゴ情勢が問題になっています。コソボ問題も、一つの免疫反応のように、私などには見えるわけです。ある一つの民族の中にもう一つの別の民族がいる。どこからどこまでが自己で、どこからどこまでが非自己かが問題のようです。自己と非自己の戦いのようなことになっています。

免疫系は、単なる排除をするだけではありません。しばしば異物に対して寛容になって、受け入れる場合があります。イミュノロジカル・トランスという現象です。これは免疫の非常に重要な研究対象になっています。ああいう場合に、民族同士がどのようにしてトランスになり得るか。そのトランスを作るための条件は何か。こうしたことを考える場合、例えば免疫のルールをながめ、免疫現象をながめることによって、ヒントが得られるかもしれないという感じさえするわけです。

官僚組織も同じように見てみましょう。初めは万能の行政官が一人いたわけです。それが自己複製を繰り返して、だんだん多様化していった。多様化していけばますます冗長化していく。互いの情報交換ができなくなる。こうして官僚構造は途方もなく冗漫な組織に

なってしまう。中国では、清の始皇帝のころにできた非常に単純な行政機構が、ごく最近まで科挙制度などを通して続けられてきました。あれはマックス・ウェーバーなどが考えていたヨーロッパの官僚組織とは違う、独特の組織になっています。目的のない自己増殖と自己複雑化を繰り返すような構造になっていたのでは、私は思うのです。

このように、生命のルールは、単に生命現象だけでなく、生命現象の結果として作り出される言語、都市、国家、政治などにも反映されているのではないか、という気がするのです。

基本的人権というのがあります。基本的人権とは何か。辞書では「生まれつきもつていて、侵害することも、変更することもできない権利」と書いてあります。これはまさにゲノムに相当するものです。人間全体が共通に持っている、人間だっただれでも持っている性質がゲノムです。それだけは侵すことができない。それがゲノムの不変性です。そういうふうに見ると、人種差別などがいかに取るに足りないか、ということがよく分かります。

また、ゲノムの中には、一人一人、少しずつ違っている部分があります。それは個性の問題です。人間の個性も否定することは

できません。基本的人権についても、人間の不変性だけでなく個性を大切にすることが、どうしても必要なことだと思います。これも基本的には、遺伝子の中に書き込まれていることなのではないか、と思うのです。

そういうことから私は、生命現象を、都市や国家、経済活動、あるいは宗教などの文化現象の中で起こっていることを理解するために入り口、あるいはヒントとして使うことができるのではないかと思うのです。

きょうは、そういうことを考えるために、単なる機械論的な遺伝子決定論ではない別の動きというのが、生命科学の世界で起こっている、ということをお願いしようと思つて、こんな話をした次第です。

(文責・村上)

多田 富雄氏(ただ・とみお) 一九三四年茨城県生まれ。千葉大学医学部卒。七四年千葉大学医学部教授。七七年東京大学医学部教授。九四年東京大学名誉教授。九五年から現職。著書に『免疫の意味論』(青土社)、『生命の意味論』(新潮社)ほか多数。

六月二十二日(火)

速水 優

(日本銀行
総裁 昼食会)

質疑応答から

福沢重夫企画委員(代表質問) 現在、減

税や公共事業など政府関連需要で景気が支えられている、という話がありました。しかし、今後そうした政府政策のキャンフル効果が失われると、秋には再び景気の腰折れがあるのではないか。

仮にそうなった場合に、ゼロ金利というギリギリのところまできている金融政策について、次に打つ手はあるのか。量的緩和やインフレターゲット、あるいは国債買い切りオペの増額など、日銀として景気に対処する余裕があるのでしょうか。

速水 あと何ができるのかという質問ですが、金融面ではできるだけの手は打った、というのが正直な答えです。

金融というのは財政と違います。財政、特に公共投資は、予算を決めて公共投資が始まれば、すぐにその分だけ仕事も雇用も増えていく。いわゆるフローとして非常に効果があるわけです。ところが金融は、いわゆるパラシスシートに対して、低い金利の資金を入れ

ていくということなのです。毎日、市場が動いており、そこにどうやって潤沢な資金を供給していくのか。そういうことを、私どもの第一線のベテランたちが毎日、頭を使っ

ていく。金融というのは、一つの政策が長期にわたって効果をあげていくというのか、次第にそれが浸透していくというものなのです。コールレートからタム物金利、長期金利へと順次波及し、さらに債券、株へも及ぶ。そういう経過が見られたわけです。

ですから、そういうことをうまくやっていけば——市場が機能しなくなるようなことにならなければ——資金を流していくことは、まだまだ続けていって十分効果があがっていくとみています。

そういう意味では次に何をやるか、上げなのか下げなのかと言われても、答えられない。デフレ懸念が解消するまで、私どもはいまのゼロ金利を続けていく、毎日の資金の流れを見ながら、これを続けていくというのがいまの私どもの決定です。

福沢 最近、地域金融機関の破綻が相次ぎました。三月の公的資金注入で、主要金融機関を中心とした金融システム問題は一段落したと思います。金融再生委員会は、地域金融機関向けの公的資金注入に当たって、自己資本比率八%達成をめどとする、という基本方針を明らかにしています。それにペイオフ凍結解除の議論も始まっています。この八%基準が金融機関にとって非常に厳しいという声もある。金融システムに関する動揺は、今後も続くのでしょうか。

速水 八%が厳しいかどうかですが、これはいわゆるBIS規制という、グローバルな約束事といえますか、金融というのはグローバルなマーケットですから、一つがつぶれると、金融システムへの影響はその国だけではなく、諸外国に広がっていくわけです。そういう状況を前もって考えて、BISで「資本を十分に持つ」ということを、ルールとして作ったわけです。

海外に店を出して、ニューヨークやロンドンでも多くの取引先を持って、あるいは銀行間でも広い取引をしている、いわゆるマネーセンター・バンクといったような銀行については、破綻した場合の影響が大きいだけに

「八%持て」と指導して、ここまでできているわけです。

バブルの後遺症で、日本の銀行の不良貸し出しが非常に多くて、そういうものの償却のために資本がどんどん減っていく。日本の資産自体が、資産デフレで減ってきているわけです。

個人の一千二百兆円の金融資産うち、八百兆円は銀行、郵便局等への預・貯金になっている。さらに三百兆円が保険、約百兆円が債券・証券であるわけです。この八百兆円のうち運用部は除きますが、五百兆円から六百兆円が、銀行の預金になって貸し出しに回っている。そういうものが資産デフレで減っていく。貸し出し先がつぶれることもあるし、担保に入れていたものの価値が著しく減価して、不良貸出も起こってくる。そういうものをよそからの資本で埋めると言っても、それは難しい。第三者割り当てで増やすとか、増資をするといったことで埋められるものではなかった。ですから、公的資本の注入しかないということ、政治家の方々にぜひ分説明させていただきました。

結局、それが法律になって、金融再生法ができたわけです。それが動き出して、この三月末に一行を除いて大手銀行が、八%の自己資本比率を守るために、公的資金を受け入れ

た。それによつて三月決算で償却が行われ、新しいゆとりをもって、新たな貸し出し、あるいは銀行の資産の動かし方が始まっていく、というのが現状です。

そこに金融再生委員長が、地方の銀行についても、健全経営のためのルール・ブックのようなものを作り、それを出されたときに、自己資本比率が四%となつていくけれども、地方の銀行も場合によつてはもつと十分にしていく必要がある、ということ言われた。それが、八%と伝わったむきもあつたようです。

大手銀行はだいたい注入が終わつて——日長銀、日債銀は一時的に政府の管理銀行になり、銀行自体の買手を探す段階にきているわけですが——その他の銀行は、先の注入で一応何とか行けそう、ということになっていると思います。

地方の銀行についても、いくつかが破綻状態になっています。そういう銀行については、いま特別管理人が決まつて、日銀が特融を出しつつ再建を図つたり、あるいは今後どう処置していくかが検討されている段階です。

地方銀行の場合は、まだ全部が落ち着いたというわけにはいかないと思いますが、特に地方の古い銀行の場合は、その地域の取引先や有力企業などから増資の話が出てきてい

ます。地元での資本の強化がかなり進んでいるというの、うれしいことです。長年の信用、信頼のたまものであると思つています。こういうことが動きつつある、というのが現状です。まだまだ小さい破綻が起こつてくると思いますが、金融システムは一応落ち着いてきたと申しあげられると思う。

破綻した場合でも、金融システムを混乱させないような法律の体制ができたし、預金保険機構も十分な資金をもって動いています。さらに私どももルールを作つて、必要と思われるところには、日銀特融を出しています。そういうことなので、金融システムの混乱はほぼ落ち着いた、と言つてもよからうかと思つています。

福沢 日銀のバランスシートについてです。預金保険機構への貸し出し増加や、特融の回収状況、あるいはCPオペの拡充などで、バランスシートの劣化が目立っているように思われます。この点についてうかがいたい。

速水 日銀のバランスシートについてご心配をいただき、ありがたく思うのですが、私は毎日バランスシートをにらんでいます。銀行券はいま四十九兆円ぐらい出ています。こ

これは私どもにとつては、債務になるわけですが、この四十九兆円の銀行券に対応する自己資本あるいは引当金は、約一割近い水準を維持しています。

資産については、昔のように貸出というのはほとんどなくなりました。手形貸付は三月末で約一兆円の残高ですが、これは昨年の一月に、貸し渋りを防ぐために特別に優遇措置をとつて貸出をしているものと、破綻銀行に対して貸している、いわゆる二八条貸付という日銀の特別融通です。これも拓銀をはじめ山一とか、つぶれたところに貸しているもので、この特融残高もかなり戻ってきています。いま残高は五千億円ぐらいになっています。

そのほかに、預金保険機構への貸付。これは日長銀、日債銀等が公的管理に移行するときの必要資金と、その後の経営に必要な資金に主として出ているわけですが、これが約五兆円。これは政府保証がついていますから、そんなに心配する必要はない。いま市中金利が安いですから、預金保険機構も市中で調達しています。

さらに買入手形が四兆円ぐらい。これは、CPなどいろいろな手形があります。CPの発行残高は十四兆円ぐらいですが、日銀保有分は、おそらく三兆円ぐらいではなかった

か。正確な数字はいま分かりませんが、これも減ってきています。日銀が資産に持つこれらの手形等については、非常に厳重な基準を設けており、ごく最近、さらにそれを見直して、健全なものだけを持つことになっていきます。

したがって、これらのものが、そもそも劣化しているとは思えません。優良企業の債務が目銀のCPその他になつて入ってくるというものは、いままでのように銀行経由の間接金融だけではなく、直接金融の道が広がっていくことにつながりますから、その査定を厳重にしさえすれば、これからの流れに沿った方向ではないかと思つていきます。

最後に、一番大きいのが国債です。四十九兆円の銀行券に対して五十兆円ぐらい保有しています。これには長期国債も半分ぐらいありますが、残りはこの四月から市中公募が始まった政府短期証券です。

これは市場で自由に売買できるものですが、このような市場ができたことは、これから円の国際化をはかつていくうえで望ましいことだと思えます。こういう政府短期証券等は借り手が政府です。しかも昔のように有価証券取引税はかからない。また非居住者の保有については、世界の諸市場並の税金の扱いになつてきています。

いままでは、日銀の手形を売って資金を吸収してきたわけですが、そういうものをだんだん減らしていく。むしろ、日銀が持っている資産を直接市場に売ることによって、資金を吸収する。政府短期証券をオペレーションに使っていくことは、健全化の道だと思えます。それと同時に、国債市場あるいは債券市場、国際金融市場を、円中心に作っていく過程で役に立っていくと思います。

そういう方向で債券市場、証券市場の拡大、そして国債を含め流動性を高めていくことが、当面の大きな課題の一つになつていくわけです。

ですので、決して資産の劣化は起こっていない。バランスシートが悪くなつていない。どなたが見ても思わないだろうと思えます。この一年で、かなり大きく変わってきています。中身は健全化しています。

三好崇一（朝日OB） ゼロ金利誘導政策を、デフレ懸念が払拭されるまで続けるといってお話でした。そのデフレ懸念が払拭されるという条件や環境を、どのように考えているのでしょうか。いま経済情勢は確かに小康状態にあります。しかし、仮にニューヨーク市場が暴落すれば、アメリカ経済は一変する。その場合に、世界同時不況ということも予想

される。そういう懸念があっても、いまの政策を続けるのかどうか。

一方、日本の財政は、国債を増発して何とか不況対策をやっていますが、これだけ増発すれば、インフレの火種をまいているようなものです。いったん条件が変われば、今度は激しいインフレになる恐れもあるわけで、見解をうかがいたい。

速水 デフレ懸念の払拭を具体的にどのような基準で判断するかといわれても、どれか一つの指標を見れば分かるというものではありませんし、ア・プリアリに一定の条件を示せるというものでもないと思う。あくまでも、先行きの景気見通し、あるいは金融状況など、将来の物価動向をめぐるさまざまな要素やリスクを、総合的に勘案して判断していくべきもの、と考えています。これは日本銀行の英知を絞って判断すべきことだと思っています。そういう、さまざまな要素については、まだこれまでのところ大きな変化は出ていない、と言わざるを得ない。

この間のGDP統計で、一―三ヶ月が非常にいい数字が出たわけですが、これだけで民間需要の回復力が、今後、自律的に強まっていくとは、直ちには判断できない。

五月の卸売物価がまた少し上がってきてい

るが、物価の基調については、ここところ卸売物価については原油とか国際商品市況が上がってきている面もあるので、もう少し慎重に見極める必要があると思っています。消費者物価についても、ほぼ横ばいのところまできていますけれども、これももう少し動きを見ていく必要がある。

需給のギャップや賃金動向などから見て、物価に対する潜在的な低下圧力が、引き続き残っているのではないか。また特に、雇用の問題がこれから大きく取り上げられてくる。そういう意味で、デフレ懸念の払拭が展望できるとは、まだ至っていない、と判断しています。

インフレの心配については、長年の低金利で、年金生活あるいはフィックスされた所得で暮らす方々が――特に中高年の方々が――大変苦勞の多い日々を過ごしていることは、私どもも十分気にはしておりますし、早く上げたいという気持ちはあるわけです。けれども、ここで下手に物価が上がりだすと、むしろそのことの方が、そういう方々にとっては困ることになるのではないか。運用利回りも低く、物価も上がってインフレ傾向が出てくるようなことが、生活を最も不安定にするものではないかと思えます。

そういう意味で、例えば国債の引き受けを

して、将来のインフレの種をまいていくということ――あるいは国債の買いオペもそうですが――当面のデフレ対策の中にも、将来のインフレの種にならないように、慎重に構えていく必要があると思っています。この点は、これからの私どもの大きな課題であり、宿題であると思っています。

(文責・長谷川)

六月二十八日(月)

柳沢伯夫

(金融再生委員会
委員長 昼食会)

質疑応答から

内山敏夫企画委員(代表質問) 大蔵省の

体制下では、検査の結果が監督当局の意向に
よって左右されてしまう、という話がありま
した。確かにこれまで、検査の結果、灰色の
ものがあっても念書を入れさせてOKにして
いた。そして行政指導で、大蔵の言うことを
いろいろ聞くようにさせる。最後には、大蔵
省から天下りを受け入れる、というような図
式がきわめて一般的ではなかったかと思う。
柳沢さんの言われるように、大蔵省との決別
ということであるならば、これからは「金融
監督庁から民間金融機関へ天下りはさせな
い」と、お約束はいただけませんか。

柳沢 専門知識を買われ、ヘッドハンティ
ングされる、というようなことは十分あり得
ると思います。

ただ、役所の人事の一環として、役所が世
話をするというような——天下りにはそうい
う意味もあるのです。役所の人事の一環で行
われる。そのポストは役所の株だ、というよ
うにいろいろ付随したルール化みたいなこと

が行われたというのが、内山さんがおつしや
る天下りだとしたら、それは断固あつてはな
らないと思います。

ただ、ヘッドハンティングというのは、私
は、専門知識をもっているということからす
ると、十分あり得ると思つています。ある意
味で、マーケット、市場原理にゆだねられ
る、ということは十分あり得ると思つていま
す。

内山 ただ、いままでの天下りといつて
も、それは専門的な知識を買われた結果であ
る、という説明がすべてのケースについて当
てはまると思つていますが。

柳沢 まったくごまかしです。そういうこ
とをやつていたから、今日のような癒着とい
うか、そういうものが起こつたと思つていま
す。私は、そういうことは断固あつてはならな
い、と思つています。

内山 もう一つ、いろいろ怨嗟の声があり

ます。銀行が破綻すると、いままで大蔵省の
指導を受けて、駐車違反をやつていたつもり
が、まるで殺人を犯したような扱いを受けて
しまう。このルールの適用の変化というの
を、いつたいどう説明するのか。つまり、公
平な扱いをしていないではないか、という怨
嗟の声に対して。

柳沢 これには、二つ申しあげたい面があ
ります。一つは、あとでペイオフの話が出る
かもしれないが、日本のどこに原因がある
かというのを、いまわれわれは究明しようと
考えているわけですけれども、いわゆるゴー
イングコンサーンのときの資産・負債の評価
の差額と、いつたん清算過程に入ったときの
資産と負債の差額が、ものすごく違いすぎる
のです。

いまのところ、われわれも反論ができない
ものですから、だまつているわけです。マス
コミは「検査がいかげんだからだ」と指摘
する。何々銀行をみる、例えば兵庫銀行をみ
る、あのときに不良債権と言つたのと、いざ
清算になつて「これが債務超過額です」と
言つたのとは、ウン倍じゃないか、というよ
うな批判を受けているわけです。

内山 それも大蔵省にいた同じ検査官が、

監督庁に移って同じ検査をやった結果ですね。

柳沢 そうです。しかし、このことは、ひよつとするとわれわれの制度にも原因があるのではないか。ちよつとまだ、そのところまで深入りするの、今日は差し控えさせていた方がいいのですけれども、なぜ、われわれの方だけこんなに違うのだろうか。

たとえばアメリカの場合、「ペイオフを實行します」と言っても、実際に清算過程になっても、その差が非常に少ない。ですから、それはのれん代ぐらいで穴埋めできてしまう。したがって、預金者に迷惑をかけないで処理できる。それで、粉飾とかに結びついていかずすむわけです。

日本の場合は格差が激しくするものですか、犯罪を構成してしまうかもしれない、というような事態になってしまう。

それからもう一つ、ちよつと冷たいもの、言い方になるのですけれども、やはりこれは過渡期なのです。過渡期でして、私などにとつても立派な大蔵省の先輩、個人として私淑したかったような方が、ひよつとしてそういうようなことになるかもしれない、というようなことがあり得るわけです。

やはり時代の転換期ということで、価値観を変えていかなければいけないということ

す。個人としては同情を禁じ得ないわけですが、考え方として、感じ方ではなく考え方としては、これは時代の転換期としてやむを得ない、と割り切らざるを得ません。

内山 民間の方の責任の取り方、過渡期でもあるし、取らざるを得ないのは当然だし、分かったといえましょう。

しかし、銀行破綻で民間トップの責任が問われているのはいいとしても、大蔵省の行政指導の責任は問われなくていいのか、という質問が会場の出席者から多くきています。宮澤さんは「それはいいのだ」と、国会でお答えになっていました。

そういうことで、政治なり行政の信頼を保ち続けることができるのでしょうか。行政がダメなら、政治であれ何であれ、とにかく責任をきちんととらないと、けじめをつけないといけないのではないか。たとえば、役所のOBに年金の一部を返させるとか、けじめをつけさせるべきではないか、という指摘もあります。いかがですか。

柳沢 最初に申しあげたいのは、ある意味で、大蔵省は責任を十分とらされているという事です。大蔵省は金融行政の失敗の責任をとらされている、ということについて、理

解を求めておきたいと思えます。これが第一です。

内山 それは大蔵省が解体される、ということですか。

柳沢 解体されるということですか。それから個人としてみますと、本来だったらあのポストで花道を退くことができたのに、そういうことはもう与えられない、等々です。そういうことがあります。

それからもう一つは、こんなことを口にして誤解を招きたくないのですが、もし法的な責任ということであれば、それは司法の判断するところであって、だれしもが法の前に平等です。もし責任があつた場合に免れるものではない、ということに尽きると思います。何か予見を私がついているとか、そういうことでは金輪際ありませんから、そのところでは誤解のないようお願いしたいと思います。それから、政治などは、これはまったくもつて選挙で、選挙民に批判をされる。政党の消長という形で、政党まるごとが責任をとられるということであろうと思えます。

内山 すべては選挙とマーケットでの評価に待つ、ということですか。

柳沢 行政責任について「それでいいのだ」と宮澤蔵相がおっしゃった真意はわかりません。宮澤先生は、大蔵省から金融部門が剥離されることに対して、いかにも何の問題もないように、国会でも恬淡としてお答えになつていきます。とても私とは、気持ちの上で差がある、ということを感じています。

つまり、私にとつては、痛々しい限りという事です。しかし、一度はこういうことで責任を取らされるのだから、というのが、私が、財政と金融の分離について納得する、ほとんど唯一の理由です。そのぐらい痛々しい責任を取っているのだということ、心情的に訴えるだけで、ご理解をいただきたいとまでは言いませんが、そう思っています。

内山 大臣は、先ほど「金融庁で金融政策の企画立案が、果たして十分にできるのか」とおっしゃいました。かつての大蔵省は、日本国の企画部といったような存在だったのですけれども、その性格はいらないというのが、お話の幹だったと理解したのですが、やはり、大蔵省がその機構を担っていくということに、柳沢さんはくみされるわけですか。

柳沢 マクロ経済政策としての財政政策

と、マクロ経済政策としての金融政策の分離というのは、これは日本銀行法の改正で解決がついたのです。それと違う次元で財金分離というのだとしたら、金融機関行政を財政の部門と分離しなければいけない、ということまでだれか言った人がいるのだろうか。私はあまり聞いたことがない。

何が故に、金融機関行政が財政によって歪められたのか。歪められたことが論理必然的であつた、といえるのだろうか。

マクロ金融政策がマクロ財政政策のあり方によって歪められた。だからパブルが生じた。私はこれについても若干まだ意見がありますが、それなりに分かる議論です。それなりの理屈の通つた話として、いまの日本の中では一応落ち着いたと思つています。

ただし金融機関行政が、財政当局と、なぜ論理必然的に分離していなければならぬのか。このことについて、きちんとした議論を聞いたことがないように思う。

私はむしろ、金融検査行政の独立こそが重要だと思つています。これを独立させれば、私は、当初からそういう議論を吐いているわけですが、金融機関行政というのはそういうもので、十分批判に対して答えられるのではないかと思ひます。

個人としてそういう議論を持つている人間

ですが、今回のことは、そういう議論の問題ではなく、責任論という国民感情との関係でやむを得ない、ということですよ。

そのうえで、金融庁というのは非常に狭い範囲を受け持つところなので、これから人事なども全部やっていくわけでしょうけれども、そういうようなことで、本当に企画立案の使命というか、そういう付託に答えられるかが問題ではなからうか、ということを描したわけです。

内山 あと一つだけ、会場からのペーパーによる質問にもとづいてうかがいます。

再生委員会の仕事であるはずの日債銀の国有化の決定が、再生委員会の委員任命の前日に行われたのはなぜか。これは再生委員会なんか知らない、と自ら宣言しているようなものではないか、という指摘です。

柳沢 金融再生委員会の委員が発令されれば、すぐ何かの処分ができる体制になり得るかという、そうではありません。まず組織を立ち上げて、議事規則をはじめいろいろなものを、あるいは基本方針というものを決めなければいけません。ですから、私どもが金融再生委員会を立ち上げて、実際に金融再生委員会の事務ができたのは、私の記憶では一

月のなかばです。やはり一カ月かかっていま
す。

十二月十五日に確かにスタートはしたので
すけれども、実際にワークできたのは一月十
五日ぐらい。日債銀の処分というのは十二月
十三日にやらせていただいたわけですが、こ
の事を考えていただくと、通常、やむを得
ないということと理解していただけるのでは
ないでしょうか。

今静行（個人D） 債権放棄と公的資金注
入の問題について質問したいと思います。

いま、日本の法人企業というのは二四六万
社あります。そのうち資本金一〇億円以上の
大企業は、わずか六三〇〇社、〇・二五%弱
です。一億円以上のところでも1%強です。
ゼネコンはじめ、大きなところの債権放棄に
ついて、経済の合理性だというような話もあ
りました。それなら、中小零細、個人も含め
て、規模は小さいけれども、同じようなこと
が起きていると思います。柳沢委員長は、こ
うしたところに対して、そういうことを積
極的にやった方がいいという考えでしょうか。

柳沢 時間の都合もありまして、はしょつ
た説明をしたわけですが、債権放棄を認める
に当たって条件としているのは次の点です。

いまおっしゃった経済合理性に加えて、そ
こが一番ポイントなのですが、経営責任、そ
れからさらにその企業の置かれた地域での社
会的、経済的な影響の度合い、ということ
を言わせていただいています。

あえて減資ということをおっしゃって
減資ということまで言うと、手続き的に
ものすごく時間がかかってしまうのです。そ
れで、実行上は減資ということと株主責任も
とってもらいたいという気持ちは、私が記者
会見などで述べさせてもらっています。

私もがこうした基本方針を打ち出したと
きに考えたのは、何よりも率直に言って、経
済全体の道行き、特に雇用の問題ということ
でした。したがって、いまわれわれの出した
方針の中には、小規模企業の方とか個人の方
とかは入っていない、ということになつたわ
けです。

山田厚史（朝日） 金融サービスマス法につい
てうかがいます。実際の事務作業は遅々とし
て進んでおらず、まったく見通しがついてい
ない。先ほどの話で、自由化の問題が、二十
年、十年遅れたとおっしゃいました。あのと
き大蔵省がしつかりやっていたら、今回のよ
うなことはなかったわけですか。今度も、ピツ
グバンが始まりながら、金融サービスマスを

ほつたらかして、同じことをするのはない
か、というような気がします。一体いつご
ろ、どのような手立てで行うのか、はつきり
見通しと決意を。

柳沢 私は非常に小さい狭い権限しかもつ
ていません。金融サービスマスの企画立案とい
うことは、私の権限外のことです。ただ気持
ちとしては、申しあげたとおり、特に401
kなどというようなものが導入されることにな
れば、金融サービスマスの制定、定着とい
うのは待たないだ、と思っています。

だから、私はちよつとイライラしているん
です。はつきり言って、もうちよつとテンポ
よく、たとえばペイオフ問題にしても、やは
り結論を出すのが、早ければ早いほどいいだ
ろうと思っています。

一年ぐらい前で、預金が相当移動してし
まったあとに「ペイオフを行ったあとの、
セーフティ・ネットはこうでございます」と
言っても、もう十日の菊なんです。

（文責・岩崎）